【論　文】

「本土化」と「沖縄化」の中の沖縄の社会と意識
――ある沖縄女性の生活史調査を通して――

犬　塚　協　太

1．はじめに

日本におけるエスニック・マイノリティの代表的存在として沖縄の人々を想起することは今日通例といってもよいであろう。しかし、その沖縄の人々エスニックなアイデンティティと本土との関係をめぐる諸問題は歴史的には常に複雑な様相を呈しながら近年にまで及んできている。

17 世紀の薩摩藩の侵略による属国化以前の「古琉球」と呼ばれた琉球王国は、「ヤマト」の政治的支配からは独立したひとつの国家として、東アジアの海上交通の要衝という地理的背景を積極的に活用し諸外国との交易を通じてまれに見る経済的繁栄と文化的発展を遂げていた。また薩摩属領化後も、統治機関としての琉球王国は存続しつづけ、清朝との両属体制を維持しながら、沖縄本島以南の直接的統治は幕府や薩摩藩ではなくこの琉球王府によって行われ、そこではやはり「ヤマト」とは明らかに異質な政治的宗教的統治システムのもとで、独自の生活と文化が営まれ続けていた。

しかし、1872 年から 79 年にかけてのいわゆる「琉球処分」によって王府が廃され、沖縄県として近代日本の統治体制の一部に完全に組み込まれてからは、戦前にかけてむしろそのエスニシティとしての独自性は近代日本国家の支配システムの絶対主義的画一化の圧力の中で厳しく抑圧されてきたことは周知の事実である。悲惨な沖縄戦を経て、戦後冷戦体制の中での米国統治下で、今度は米国の世界戦略の一環としての地政学的位置づけによって、沖縄は基地への抵抗と依存という苦しい葛藤状況の中で、本土復帰を熱望するという形で現状の打開へのシンボルとしての復帰運動にそのエスニックなアイデンティティを求めるという複雑な状況を抱えていった。そして復帰後は、依然として存在し続ける基地問題を抱え、一方で高度経済成長の流れに翻弄されて本土との経済格差は解消されないまま本土への経済的依存をさらに深めるというディ

レンマに陥る中で、とくに文化的・生活様式的な本土化は進んだ。近年ではさらにそこへグローバル化の流れまで加わって、沖縄としてのエスニックなアイデンティティをどこに求めるのかという根源的な課題が突きつけられてきているというのが今日の沖縄をめぐる状況の概要であるとひとまず捉えることができよう。

こうした概括を踏まえ、マルチ・エスニック社会としての日本におけるエスニック・マイノリティの生活の場である今日の沖縄が抱えている現代的課題として、ここでは宮台真司の整理に基づきながら、3つの中心的問題を例示しておこう(宮台,2005)。

第一は「本土の犠牲問題」である。現実に沖縄の社会問題の中核として常に喧伝されてきたのはこの問題であろう。歴史的には古くは上述の薩摩侵攻にまでさかのぼるこのテーマは、しかし、実態としてはもちろん明治から戦後にかけて近現代のヤマト統治の政治的・経済的犠牲となり続けてきた沖縄という図式でその本質が表現される。その事態の深刻さはすでに周知の通りである。戦後日本政府が、憲法9条と安保条約のセットによって行ってきた米国への基地貸与と本土防衛とのバーターは、文字通り沖縄の事実上の米国への「人質」としての位置づけによって当の沖縄にとっては完全に片務的なものであり続けている。したがってそれは常に日本国家の中での沖縄のこうした政治的位置づけへの反省と見直しを求めるという形で、機会あるごとに表出し続ける課題である。

第二は「域内対立問題」である。エスニシティという観点から見るとき、「日本はひとつ」という観念が幻想であることと同様に、実は「沖縄はひとつ」という観念も幻想に過ぎない。確かに沖縄には琉球文化圏としての同一性があり、ヤマトよりもむしろ朝鮮半島や中国華北地域と共通する強固な祖先崇拝に代表される儒教的規範文化の影響がほぼ共通して存在する。しかし、すでに琉球王府の時代から、王族・士族を頂点とし、離島農民らを最下層とする厳然たる王国統治のハイアラーキーは成立していた。そこでは具体的には階層間では士族による農民への差別や、地域的には本島による先島など離島への差別、あるいは離島間の抗争・対立などが存在していたのである。筆者がここ数年来、アジア家族の比較研究を通して明らかにしてきたのも、沖縄の伝統的とされてきた家族慣習や規範が、実は本島南部の士族層にのみ顕著な「作られた」儒教的伝統であり、むしろ沖縄の本来的な非儒教的家族規範が、本島や士族による支配に長年虐げられてきた宮古島のような離島の農民家族の意識の中にうかがえるという、まさにこの「域内対立問題」の典型的な歴史的事例であった(犬塚,2006)。そして今日ではこの問題は、たとえば普天間基地移転先としてヘリポート基地建設予

定地に本島北部の辺野古地区が擬されてきた経緯にも明らかなように、市町村合併の推進という統合と分権をめぐる地方自治問題と絡んで、地域間の政治的発言力の格差を拡大させる方向に進んでくるといった新たな展開も示している。

第三は「構造的貧困問題」である。これは社会学における「従属理論」の枠組みに基本的に合致する内容と見てよい。貧困な地域が近代化を求め、必要とする外貨獲得のために伝統的農業における作付け作物を換金作物に全転換する。しかし国際市場で買い叩かれて貧困化がさらに進む。しかし元に戻ろうにも自立経済圏を支えた生態系や社会資本はすでに崩壊しており、悪循環から脱却できない。こういったパターンに象徴される構造的貧困の悪循環が沖縄にも存在している。そして今日これは従来からの基地や補助金・交付金に依存した経済の問題にはとどまらないより深刻な構造的課題でなりつつある。とくに1995年の米兵少女レイプ事件に端を発した沖縄特措法によって膨大な補助金・交付金が注入され、この利権に中央から沖縄の住民にいたる連鎖的な依存構造が完成して以来、沖縄では補助金漬けの公共事業なくしては経済が回らない体制が完成したといってよい。農民のための土地改良で土木事業が儲かるからといっては大量の離農者が生まれ、漁民のための港湾改良で土木事業が儲かるからといっては大量の離漁者が生まれている。その結果地域の伝統的共同体の残滓もここへきて一気に解体し、沖縄の地域としてのアイデンティティは拡散しつつある。

これら宮台によって整理された3つの構造的問題に加え、さらに近年沖縄の生活と文化のアイデンティティをめぐっては加速するグローバル化と本土化の動きを無視することはできない。そこには、それらへの同調だけでなく、反発による対立的構図によって一種の沖縄ナショナリズムというべき新たな動きが生み出されつつあるとも捉えられる現状が存在しているからである。沖縄のエスニック・アイデンティティの今日を考える上では、上記の3つの問題と並んでこの点への注視もまた今求められていることに注意しておく必要があるであろう。

本稿は、以上の現状認識と問題構成を踏まえ、平成18年度静岡県立大学教員特別研究費(学部長権限分)による研究助成を受けた研究プロジェクト「マルチ・エスニック社会としての日本―在日コリアンおよび沖縄の人々の生活史調査を通して―」において筆者が担当した沖縄調査の結果をもとにまとめたものである。本調査は主として生活史調査の手法によって、あるインフォーマントのライフ・ヒストリーの聴き取り調査を軸に、その生活史全体を通し当該インフォーマントの視点と意識を通じてこれらの諸問題や沖縄のエスニシティの有様が現代の沖縄においてどのように浮かび上がっ

てくるかを明らかにすることをめざして実施された(調査期間は、2006年12月15～18日、2007年1月5日～8日、同3月9日～12日)。もちろんオーラル・ヒストリーを明らかにする生活史調査の手法に基づくインフォーマントの自由回答による聴き取りが中心であるから、直接上記の問題へのインフォーマントの見解を回答してもらうといった標準化された調査票調査の形式は一切とられていない。むしろ全体として上記の諸問題を含んだ沖縄の現代史をインフォーマントがどう生き、沖縄と本土およびその相互関係の現状にどういう意識や見解を持つに至ったかを聞き出すことに調査の主眼が置かれている。ただし、今回の調査においては、通例の生活史調査とは若干異なる手法と報告の形式を取らざるをえないという結果となったことをあらかじめお断りしておかなければならない。もっともそのことは後述するように決して本調査の調査成果としての意義を減ずるような性質のものにはつながらないよう十分な配慮によってカヴァーされていることもまたあらかじめ付記しておく。

まず本調査の実施に際しての条件的制約について触れておきたい。本調査は本来少なくとも10ヶ月程度の準備および実施期間の想定のもとに計画された調査であった。しかし計画採択と予算執行の認可が当初の想定よりかなり遅れたため、実質的には2006年12月から4ヶ月弱の期間しか調査の実施にあてられなかった。しかも調査地が沖縄と遠隔地であるにもかかわらず、時期的に通常授業期間が大半のため長期の休業期間を調査に当てることも不可能であり、加えて現役の公務員であるインフォーマントへの依頼と聴き取り調査の日程調整は年度末を控えた時期で困難を極めた。

したがって通常この種の生活史調査で必要な長時間にわたるインタヴューを組むことは実際上不可能であった。前後3回におよぶ聴き取りでは残念ながら1回につきせいぜい数時間程度の時間しか取れなかったことは残念であったが、現状ではこれが条件の許す限りでの最大の聴き取り結果である。

しかしこうした困難な条件下にもかかわらず(あるいはであるからこそ)、筆者があえて他に代替者を求めず今回のインフォーマントからの聴き取りを実施した理由は以下の通りである。

第一には、当該インフォーマントが現代沖縄のエスニック・アイデンティティの形成に直接最も大きな与えた時代としての沖縄の戦後史をちょうど生き抜いてきた世代にあたるということである(1949年生まれ)。このことは一般的な生活史調査のインフォーマント選定の条件以上に沖縄においては重要な意味を持つ。なぜなら先の問題構成に

おいても概観してきたように、現代の沖縄のエスニシティに直接関係する3つないし4つの基本問題をはじめとして、現代沖縄の社会・経済・政治・文化のいずれの側面においてもそれを規定しているあらゆる諸条件が、それまでのすべての沖縄史を通じて根本的に激変した戦後の沖縄の歴史に直結して存在しているからである。その点で今回のインフォーマントのように自らの人生の軌跡がちょうど時間的に戦後沖縄の激動期と一体化しているインフォーマントの場合、通常の生活史インフォーマントのような高齢者ではなく現役世代ということもあいまって、より明確な記憶のもとでその時代と現代へのみずからの意識の表白を得られる可能性が高いと考えられるであろう。

第二には、当該インフォーマントの職業が歴史研究者という専門家であるため、こうしたインタヴューに際してむしろその調査目的を自覚的に理解し、テーマに対するより直接的な意見表明が要を得てなされる可能性が高いということである。これは通常の生活史調査と今回のそれがその内容において大きく異なるポイントであろう。通例の生活史調査では、インフォーマントとしてはむしろより専門家を回避し市井の一般人を意識的に対象に選び、その普通の生活の「主観的」な道のりを発掘することで社会史的情報を得ることが重要とされる。今回の調査も当初はそうした方法を企図していたし、その方法の利点を否定するものでもない。しかし、きわめて限られた時間的条件の中でもあり、むしろここではそうした条件の悪さを逆手にとって、今回はそうした通常の手法とは反対に、時代と社会の動きに鋭敏な専門家の「主観」「客観」の混在した視座から構築される意識のあり方を自覚的に浮上させることにも十分意味があると考えたからである。その意味で今回の調査は生活史調査の形式に則った一種の有識者調査であったといいうるかもしれない。なおこの点に関連しつつさらに今回の調査で当初意図しなかった成果として、当該インフォーマントが職業的な歴史研究者であったおかげで、その母にあたる人物に関するインフォーマント自身の著作を通して、聴き取りとしては果たせなかった戦前・戦中の沖縄の生活史(とくに座間味島「集団自決」事件関連)の補助的資料を得ることができたことは大きな収穫であった[1]。

第三には、当該インフォーマントが女性であり、しかも沖縄女性史の研究者という専門的視点を有する人物でもあったため、沖縄のエスニック・アイデンティティに関してより複合化した視点からの聴き取りが可能になったという点である。沖縄社会の文化的特徴としてしばしば女性の宗教的な地位の高さと社会的役割の重要性が挙げられる。この点について筆者はすでに先の沖縄に関する論考でさまざまな角度から考察を行ったので詳述は避けるが(犬塚,2006参照)、先の「域内対立問題」のひとつと見ることも可能な沖縄におけるジェンダーの対立構造は、両性間の対抗と協調の複雑な

規範構造をもって、現在もむしろ都市部においてより現実的な生活問題（失業率の高さと女性労働の常態化にもかかわらず低い女性の地位や離婚率の高さなど）として今日ますますその特徴的な展開を示している。今回の調査ではとくにジェンダー問題に限定してインタヴューを行う機会はほとんどなかったが、あえて女性の視点を常に意識し、沖縄における女性問題に職業的・実践的にも取り組んできた対象者からインフォーマントとしての聴き取りを得られることで、この調査結果が基層部において、単純に性別を抽象化した一元的な視点から得られたものでなくなる可能性が高いことは、結果として大きな意義を持つものといえよう。

以上のような理由から、ここでは以下に当該インフォーマントの生活史調査の結果得られた情報を中心にその概要を紹介しながら、併せて当初の本稿の問題意識に触れる諸点も論じつつ、最後にそれらを総括して報告することとしたい。本格的な依頼から調査開始まで短時日しかなかったにもかかわらず、今回インフォーマントとして、公務にご多忙な中、長時間にわたり貴重なインタヴューに熱心にご協力いただいた宮城晴美氏に、あらためて深く感謝の意を表したい。

2．生活史調査聴き取り結果概要

- 調査対象者----宮城晴美[2](那覇市歴史博物館主査)
- 調査日時----2006年12月16,17日、2007年1月16,17日、同3月11日
- 調査場所----那覇市歴史博物館

〈出生から座間味島での幼少期の生活〉

宮城晴美氏は1949年、沖縄・座間味島に生まれた。座間味島は沖縄本島那覇市の西方約40キロメートルに浮かぶ慶良間諸島のひとつであり、行政区画としては座間味村になる。氏の出生当時の主要産業は農業と鰹漁業であった。氏の生家は貧しく小学校3年生のとき、当時の沖縄金融復興基金(？)の融資を受けて生家の屋根がようやく瓦屋根に葺き替えられたときのことをよく覚えているという。

氏の父は本島の名護の出身で、幼くして両親が離婚し母は大阪の紡績工場へ働きに出たため、主に祖母に育てられた。また氏の母は座間味の出身であったが、母の母(氏の祖母)が未婚で母を産み、母の父(氏の祖父)は別の女性と結婚したため、叔父夫婦の養女として育てられた。母は当時の小学校高等科1年までしか通わせてもらえず、

上の学校へ進めないことで常にクラスメートへのコンプレックスを抱いていた。父も勉強したかったが、いわば他人の家で暮らしていたようなものだったので遠慮があって小学校より上の学校に進めず、漁に出て生活を支えるようになった。両親とも向学心があるのに家庭の事情で進学できなかった点は同じであった。

両親の出会いの詳細について氏はとくに両親からは直接には聞いていない。しかし、二人が出会った当時、母には養父(母の叔父)の決めた許婚(いいなずけ)がいたが、母にはその人物との結婚の意志はなく、座間味で出会った父と駆け落ちをして結ばれたと聞いているという。子どもの目にも両親は非常に仲がよく、また子どもたちに深い愛情を注いでいた。子どもに夫婦喧嘩をしているところを見せたことはなかった。

しかし兄が工業高校に進学したころから家族の生活は厳しく、父はそのころ鰹漁船の無線長をしていたが、給料も遅延したりしていた。それでも子どもたち全員を高校までは両親が行かせてくれた。兄も寮の舎監の仕事をして授業料を免除になった。就学旅行もきょうだい全員行けなかったが、不自由は感じていなかったという。氏は後に大学には自分で学費を工面して通うことになるが、実家にかえって親と話をするとき、あるいは今でもきょうだい同士で話し合うとき、親の愛情をひしひしと感じているということである。

母は、戦時中までは役場に勤め、戦後は幼稚園で一時教えたこともあったが、主に農業に従事していたため、氏は子どものころ養父母の家でよく過ごしていたそうである。その家の跡取り、つまり母の義兄弟に当たる長男の嫁がよくできた人で、子どもも甥・姪も平等に扱ってくれたため、氏は愛情には恵まれた環境に育ち、こうした母の実家があることで安心して成長することができたと回顧している(次男はいわゆる「集団自決」によって既に戦争中に亡くなっていた)。ちなみに氏はここで島にいた中学3年生までの主な期間を過ごしたが、そのときまで電気はなく、煮炊きはマキと石油コンロであった。きょうだいはみな料理ができるようになったという。

氏の祖父(母の養父=叔父)は鰹漁業の組合に勤め、祖母(母の養母=叔母)は削り節工場の女工として働いていた。また祖母の収入としては(後述のような事情のもとで)息子の遺族年金と自分の障害年金もその他にあった。しかし氏の家に限らず、当時の座間味は貧しいのが普通だった。小学校の通学も普段は草履履きであり、運動会になって初めて靴が買ってもらえる程度だったということである。当時の座間味にはその意味で明確な階層差はなかったと氏は認識している。明治30年代から鰹漁業で成功し豊かだったこの島は、昭和恐慌にともなう昭和初期の不況の結果貧困化し、そのころから次第に男女を問わず「南洋」への出稼ぎ、移民が増加した。鰹漁業は戦後1950

年代くらいをピークに続いたが、彼らの収入は月給制ではなく年に1度の配当制であったので、配当が行われる時期の10〜11月ごろは毎年組合に多くの人が集まっていたのを記憶しているという。島の生活での日常生活品は組合がまとめて仕入れ、島民はつけでそれらを購入し、その分は配当から差し引かれた。夏になって鰹船が入港するとき汽笛が鳴る回数で大漁かどうかが分かり、島民はその回数を数えて一喜一憂したという。

しかし、鰹船での働き手がない家族は悲惨な生活を強いられたと氏は述べている。その結果削り女工としての女性の役割はきわめて重要であった。削り作業はすべて女性の仕事であり、彼女らは自宅の庭で多種多様なカッターを駆使して削りの作業に従事した。

ただし、氏の記憶している限り、そうした場面でもとくに祖母を含む女性たちの世間話に「戦争」の話は一切出なかったという。(むしろ社交的だった氏の母の周囲の女性たちの中では「戦争」の話も出ていたようである。)

また氏によれば、こうした加工の済んだ鰹の廃物をえさにして豚を飼うことができた。そして収穫したサツマイモの不要な葉はやはり豚のえさになった。こうして飼った豚をつぶして利用するのが盆正月の慣わしであったという。氏はこうした食物を通しての生業・生活の連鎖が、鰹漁業の衰退と農業の衰退により、結果として豚の畜産の衰退にもつながってきていると近年の変化について評している。

家での家事には、食事の手伝いなど氏を含めて小学生の子どもたちも従事した。ただし男性は一般に家事をやらず、まじめで当時としてはリベラルな考えの持ち主だった氏の父のみは例外的によく家事をこなしていたという。

また氏は、座間味はモーアシビー(筆者註：沖縄の伝統社会における青年男女間の自由交際、恋愛の慣習)のない島だったとも語っている。氏によれば、座間味はもともと王府時代には唐船(筆者註：トーシン、中国への朝貢船)の風待ちの港であり、島民は唐船の船員として多くが中国に渡り、ときには密貿易なども行われ王府時代には課税を免除されて相当豊かな島であった。琉球処分後それまでの特権が廃止され島民への課税が実施されてから島は貧困化が進んだため、明治34年鰹漁業に島の主産業を転換してからは再び財政的に潤うようになったという。しかし、その間明治20年代に地元出身の某が教師となって島に帰ってから徹底した社会教育、学校教育での風俗改良を実行し、三線などの芸事も禁止され、そのころモーアシビーもこの一環として厳しく禁止されたといわれている。その後鰹で儲けた一部の家庭の子弟は上級学校への進学も行うようになり、教育熱心な気風も強まって、王府時代の慣習など沖縄の

伝統文化を否定的に見る意識は、むしろ現在まで続いているという。たとえば最近でも、島の民宿などでは地元ならではの郷土料理などを恥じて客に提供せず、かえって全国一律の冷凍食品がご馳走として供される風潮などがあるようである。

一方の動きとして、王府時代には座間味に存在しなかった琉球的「伝統」が、近代どころかむしろ復帰後盛んに行われるようになっているという事実もあると氏は指摘している。たとえば座間味には本来存在しなかった位牌祭祀が本土復帰後浸透したり、かつては伝統的に行われていた男子の養子としてのやり取りや女子相続が、沖縄の「伝統」に反する習慣として厳しく禁忌とされるなどの復帰後の動きである。戦前から戦後復帰まで、戦争による大きな断絶を経ながらも、座間味にとって近代化=本土化という意味では、その変化の方向性は常に本土への同一化・画一化を施行するものだったのに、復帰を経てとくに近年それとは逆のベクトルとしての沖縄化（というよりもむしろ王府化、首里・那覇化）という同一化・画一化が進んでいることは気になる点であると氏は語っている。

〈高校進学から大学卒業まで〉

1965年、氏は本島糸満の糸満高校に進学した。座間味には普通高校はなかったためである。この高校時代に彼女は忘れられない2つのカルチャーショックを体験したという。1つ目は戦争体験に関連している。糸満を含む本島南部は沖縄戦でも有数の激戦地であることはよく知られている。そこで氏は家族の戦争体験について語り合ううちに、クラスメートに対して「あなたのうちではどのように集団自決をしたのか」と尋ねた。しかしそのクラスメートは氏の質問を聞いても何のことかわからないと答えたという。他のクラスメートもすべて同様であり、氏が座間味での集団自決のことを説明すると、クラスメートたちは、そんなことが実際に起こったはずがないと信じない者も多かったそうである。

氏にとって、座間味での集団自決は文字通り自らの家族、親族の多くが何らかの形でそれにかかわり、彼らの中で生き残った者にも決して消えない深い傷跡を残していった決定的な事件であり、戦後生まれの氏自身にとっても人生の原点ともいうべき戦争に関わる出来事であった。氏の祖母(母の養母)は、氏が物心ついたときから常にのどにハンカチを当てて生活していたが、それはのどに深い傷跡があって声を出すことを失った人であったからである。その傷跡が彼女の夫、つまり氏の祖父によって集団自決の際のどをかみそりで切られ声帯を失ったことによるものであることを、氏は幼少期から身近に見聞きし知っていた。また母の義弟他多くの家族・親族もそのとき亡く

なっており、それが米軍の上陸によって住民の中に一種のパニックが起こってそのほかにも多くの身内がお互いに殺しあった結果であることを子どものころから何度となく聞かされて血肉化した経験となっていたのであった。(注(1)にも記した通り、この座間味における集団自決の全体像と、それが今日の政治状況の中で持つ複雑な位置づけ、および問題の原点の確認作業については、氏の母による答辞の事態の実情を記した手記、および氏みずからによる綿密な調査の結果と論考を含む、精緻な氏の著作が刊行されているので、事実の詳細は同書を参照されたい。宮城,2000 参照)

それが、あれほどの激戦地だったはずの糸満では誰一人知る人もなく、まったくそんな事実が想像もできないと否定されたことに、氏は強い衝撃を受けたのである。

二つ目のカルチャーショックは、高校の教師たちがリードして生徒たちも参加するようになっていた祖国復帰運動のデモ行進に行ったときの経験である。それまで氏が座間味で受けてきた小学校、中学校の教育では、戦後民主化を経ても後述するような事情によって戦前の価値観とあまり変わらない教育が行われ、共産主義がいかに恐ろしいかということが徹底して教え込まれてきていた。氏が何か少しでも教師に反抗すると周囲の人々はすぐ氏のことを「共産主義か」と批判したという。しかし、高校で教師のリードのもとで制服のままデモに参加しながらクラスメートと話をするうちに、帝国主義を批判し社会主義を理想化するような会話が語られるのを知り、ここでも氏は強いショックを経験したのである。

こうした2つの強いカルチャーショックの経験は、70年安保へ向けて学生運動の最盛期の1969年氏が大学へ入学するに至る過程で、氏にとってさらに複雑で混乱を招く経験へとつながっていく。

たとえば先述のように、座間味での中学校までの教育は、氏にとって戦後とはいえ復帰してきた戦前派の教員による事実上の皇民化教育の継承であった。教師はみな戦前の師範学校の出身であり、米軍のチェックはあっても実態として座間味で行われていたのは、戦前の教科書を使い日の丸、君が代を絶対視する戦前そのものの教育であったという。そこでは教師手作りの「励行」という冊子が用いられ戦前の道徳教育と何ら変わらない内容が教えられていた。また方言撲滅運動も戦前と変わらず続けられ、週の目標として9年間にわたり、標準語の励行と動作の機敏が掲げられていた。また氏によれば、方言しか使えない親は子に対し沖縄の人間としてのコンプレックスが裏返しとなって、非常に厳しいしつけを行ったという。そこでは子をしかるときのみ親としての権威が保てたのである。

ところが、糸満での高校生活では方言は日常的に使用されていた。ここでも氏は離

島と本島の「戦後」の差異にいやおうなく気づかされる経験をしたわけである。

やがて氏は1969年、国際大学(現在の沖縄国際大学)に入学する。氏はもともと歴史など嫌いであったので大学で専攻するつもりはなかったのだが、たまたま自分の授業が休講となったとき、待ち合わせしていた友達の授業が終わるまで友達を待ちながら廊下で聴いたのが機縁となって、その授業の教員の授業に関心を持つようになりその授業を選択するようになった。その授業こそ、沖縄戦をテーマにしていた歴史学者A師のものであった。その授業で氏は身近な沖縄戦の体験として、座間味の集団自決についてレポートを書き、これが師に注目されて、後に氏の論考がはじめての活字になるきっかけにもなったという。

当時氏の家庭では、妹が心臓疾患を患い巨額の手術費用を捻出するため家計はどん底の状態であり、氏は奨学金はもとより家庭教師のアルバイトを3件掛け持ちしながら学費も自分で支払いながら自活して大学に通学していた。そこでそのころ『沖縄県史』の執筆をしていた上記の大学の恩師が、座間味村の部分の執筆を氏に依頼してくれた。氏はそれを引き受け、とくに当時としては可能な限りの手段で集団自決の調査を実施した。そのとき調査の結果氏が何より痛感したのは、あまりにも女性と子どもの死が多いという事実であったという。これは、敵の手にかかって強姦されるより、子どもと一緒に死を選ぶという考え方に殉じた女性が極めて多かった結果であった。氏はこの事実から、この「レイプされて生きるより死んだ方がよい」という考え方の原点はどこにあるのかという問いに突き当たり、この答えを求めて模索していく中で、女性の手による沖縄の女性についての歴史が書かれてこなかったという事実に行き当たった。氏によれば、それまでの沖縄女性史は、伊波普猷、宮城栄昌らいずれも男性によるものであり、しかも、そこでは沖縄独特のシャマニズムを中心として王府に仕える上流女性についての記述が主流であった。氏はそこで女性による沖縄の女性史を自分がやるしかないと決意し、歴史学の研究を本格的に始めて今日に至っているという。氏はそこでは、とくに近代沖縄の歴史における女性の位置づけを明らかにすることをめざした。近代沖縄史における女性の生活レヴェルの基底にどうやってヤマトの思惑が入り込んだか、また沖縄女性の本土観はいかなるものか、本土による同化政策が女性にとってどういう意味を持ったか、そしてそれがどういうプロセスをたどって沖縄戦での女性の意識や行動にまで至ったのか、といった課題を追求しようと決意していく。そしてこの問いかけが、あれだけ嫌いだった歴史をやりだしたきっかけになっていると述べている。こうして氏は1973年大学を卒業するに至る。

<社会人としての生活と沖縄をめぐる諸問題との出会い>

氏は73年大学卒業後、まず1年間本土復帰の関連した琉球政府の残務処理のためのアルバイトに従事する。「日本人化」していく行政の中を知りたいというのが動機であった。給料は高く公務員並の処遇であったという。しかしその後1974年の1月か2月ごろ、沖縄で大学の教員が研究発表する場を持つということで創刊された『沖縄思潮』という雑誌の編集を手伝うことになった。この雑誌は結局売れないまま2年で廃刊となった。しかしこのときの編集長から改めて依頼され、1976年から氏は『青い海』という新しい雑誌の編集に携わることとなる。これは廃刊されて久しい今日でも沖縄から発信された地元の地域文化と社会を高い学問的見識から論じ続けた名メディアとして依然として評価の高い雑誌である。もともと氏は文章を書くのが嫌いで一度はこの仕事も断ったが、ちょっと手伝うくらいでいいからという編集長の言葉に結局引き受けることになった。しかし、氏にとってこの雑誌との出会いが、学校では教わらなかったさまざまな歴史の事実とめぐり会うチャンスになっていったのだとのことである。たとえばそれが沖縄戦をめぐるさまざまな事実との出会いであり、とくに座間味での教育では「低次元で劣った文化」と教えられてきた沖縄文化への再評価であった。三線は遊郭の遊びであり、モーアシビーは低俗な慣習だとするこれまでの自分が受けてきた教育にもかかわらず、座間味のオジイ、オバアたちがそれらの思い出を楽しげに回想していたことの矛盾を改めて見据え、いったい自分が何を教えられてきたかを再検討し、生まれて15年までの人生とその後の人生とのギャップから自分の島を逆照射しようと決意したのであった。そうした転換が得られたことが、この雑誌の仕事に入った大きな体験の結果であり、氏にとってこの雑誌との出会いはそれまでの人生での多くの出会いを超える貴重なものだったと氏自身回想している。そして、氏はその編集の仕事を通じ、また特集を組んだり原稿依頼したりといった作業を通して、沖縄のあらゆるジャンルと第一人者と出会い、そこから学び気づかされた多くのことを今日の自分のステップにすることができたとも語っている。なお、この間氏は、つづけていた沖縄県史編纂の仕事と並行して琉球大学に1年間研修生として通い、琉球史についての基礎知識を学ぶ機会も持っている。

しかし氏はその後、無念の思いを残して1985年『青い海』編集部を退社した。同誌は社会的にも高く評価され、この種の雑誌としては異例なほどの好調な売れ行きを続けていたが、1983年ごろから社長と編集長の意見が次第に対立する中、編集長が更迭されるという事件が起こった。編集長からは後任として残ってほしいと頼まれたため、編集長になるのがいやだった氏は、編集部長という肩書きで残留していったん

は仕事は続けたが、1984年ある歯科医からこの雑誌に出資する代わりに自分の対談を掲載してくれと頼まれた社長が編集権までその歯科医に渡すという事態に及んで、ついにこれ以上編集の仕事を続ける意欲を喪失し、退社したのであった。

その後氏は、「これまでの経験と知識を生かして、昔自分が教わらなかった沖縄の文化を子どもたちに語りたい」という気持ちを強く抱き、小学校の教員免許の取得に挑戦する道を選ぼうとする。しかし、ちょうどその年から沖縄では小学校教員の採用資格に35歳以下という年齢制限が設けられ、この条件に引っかかったためここでも氏は挫折を経験することとなった。結局フリーのライターをめざしたが、沖縄でわずかな原稿を書くだけで生活することは現実には不可能であった。そんなとき1985年から86年にかけて、たまたま琉球石油から創立35年の社史編集の仕事を手伝ってほしいと依頼があった。毎月給料を支払うから昼間原稿を書いてくれればそれ以外には拘束しないという好条件であった。琉球石油は米軍の支援を受けた独占企業で、のちの沖縄県知事稲嶺恵一氏の父が当時社長であったが、この社史ではそうした米軍との関係といった裏面史を書くことが条件といわれ、学生運動をやってきた自分の経験からも引き受けることとしたという。氏はこれによって、昼間は原稿を執筆し、夜は定時制の県立泊高校の公民の教員として希望していた教職につくことができた。この定時制高校の授業では氏は45分授業のうち15分は沖縄のトピックを必ず取り上げることにしたという。

そのころ郷里の座間味村から、「座間味村史の編集に取り掛かって10年たつがなかなか完成しない、何とか仕上げてくれないか」という依頼があった。これに対し氏は村役場に、3年で完成させるから予算をつけること、拠点は那覇に置くこと、編集委員には座間味島民を任命すること、事務所の維持費と人件費は村が支給することといった条件を提示し、村もこれを了承して、氏はこの依頼を引き受けることとなった。氏は定時制高校の教員を続けながら村史編集に取り組み、1986年から約束どおり3年後の89年に完成にこぎつけている。

同じ年今度は那覇市役所から声がかかり、女性室から女性行動計画を策定するのでまとめてほしいという依頼があった。さらに翌90年には那覇市の女性史編纂事業をスタートさせるので引き受けてほしいという依頼も続いた。やがて90年4月からの非常勤勤務を経て、氏は91年4月から那覇市役所に選考採用となり、女性センター勤務などを経て、現在の那覇市歴史博物館主査としての現在の勤務に至っている。こうした中途採用形態には一部からクレームもついたが、当時の那覇市長親泊康晴氏の支持と理解もあって採用は通過した。

この間、10年がかりで女性史は2000年に完成させることができたし、公務員という立場ではあっても、社会に対し体制批判的な発言は現在まで続けることを守ってこられているという。

〈現代沖縄の社会と文化の変化について〉(3)

氏によれば、最近の沖縄社会の変化の特徴は、内向きのメンタルな志向が目立つことである。戦後の沖縄社会は、たとえば座間味の教育について先に述べたようにまず本土復帰をめざしそこに戦前の皇民化教育の継続まで見られた時期まであった。小学校のころには日の丸が学校教育の現場でも見られたし、1959年の皇太子の結婚式のときには日の丸の小旗を作らされ、天皇陛下万歳を唱えさせられた記憶もある。そうしたときには教師が先頭に立っていたし、その後高校、大学と進むにつれ、自分の中に批判的な視座は作られていったが、やはり本土復帰運動の先頭には日の丸が掲げられていたという。

それが変わり始めたのは1980年代くらいからと思う、と氏は語った。1971年のドル・ショック、73年の石油ショック、75年の海洋博などを経て、経済問題の深刻化ののちに80年代くらいから観光産業の振興、沖縄観光ブームが起こってきた。やがて生活の豊かさが実感できるようになった人々から、沖縄独特の祭祀の見直しといったことが言われるようになった。

ここで氏が注意を促したのは、こうした沖縄の「伝統」の見直しが、単なるブームというより、「こうでなければならない」という規範的締め付けとして作用したという点である。しかもそれが本土からの観光客の増加につれて、観光化、産業化の一環として行われるようになったところにも注意すべきだと氏は指摘する。たとえばそれまで本島中部地域のお盆の限られた時期だけのお祭りだった「エイサー」が観光化とともに南部地域やさらには学校行事としても行われるようになったといったことがその典型的な例である。しかもこの場合、一方では本土からの観光客のスケジュールに合わせて、従来では考えられないことだが新暦でエイサーが実施されるなとの変化さえ見られるという(筆者註：沖縄ではほとんどすべての伝統行事は旧暦で行われるのが通例である)。また糸満に伝わる代表的な伝統行事の大綱引きは、旧暦にこだわり旧8月15日のお盆に行われるが、しかしこれを利用して秋の観光シーズンに多くの観光客を呼びこむことにも成功している。またメディアもいっせいにそうした情報を県内外に発信しこれに拍車をかける。これらは次第にそれが「見せるための行事」になってきた結果だと氏は述べる。

たとえば座間味でも事情は同じであるという。本来座間味にはなかった風習である清明(シーミー)祭(筆者註：一族が集まって祖先の墓の前で供養の宴会を開催する祖先祭祀行事)がいつのころからか旧暦3月3日に行われるようになってきた。座間味での祖先祭祀の中心は本来は旧暦1月16日に行われるジュールクンチーでありこれは今でも行われるが、年々清明祭とそのときに行われる浜下り（はまおり）の行事が盛んになってきているとのことである。こうしてかつてその地域で行われたことのない新しい形の祭りが行われるようになってくるという事態が各地に広がっている。さらに祭りばかりでなく、座間味ではもともとは墓は海岸縁りのガマ(洞窟)に作られた村の共同墓だけだったのに、最近は亀甲墓など新しい家単位の墓も増えているという。

こうした動きが人々の生活意識にも変化をもたらしてきている。たとえば最近琉球新報が行った意識調査では、祖先崇拝の意識は5年前に比べて最近の方が増加しているし、とくに本来伝統的な位牌祭祀など少なかった本島北部ではこの意識は99%という高率を示しているという。またそうした変化が若い人たちに広がってきているのも最近の特徴で、島内各地にある神聖な祈願所つまり「御願(ウグァン)」所がどこなのか教えてほしいと望む若者が増えてきたり、出版物でも若い世代向けにわかりやすく家庭の宗教行事のやり方を解説した『よくわかる御願ハンドブック』といった類の本がベストセラーになっているという。ユタ(筆者註：沖縄独自の民間の女性シャーマン)への回帰現象(ユタ買い=さまざまな悩み事や解決困難な家庭の問題をユタに相談しシャーマンとしてのアドヴァイスをもらうこと)も盛んに行われる。

氏は、こうした最近の一連の傾向に関して、近年の社会不安の増大を受けてそれを沈静化するため人々の意識が伝統的なものへ向っていると受け止めている。またここで氏がとくに注目しているのが、メディアの役割である。こうした沖縄の伝統の見直しには、先ほどの観光化とも関係するが、地元住民よりもむしろ本土からの旅行者や移住者の影響が大きく、彼らを沖縄へ駆り立てているものが、近年のメディアが作り出してきている「癒しの島」といった沖縄のイメージであるからである。とくに最近沖縄にあこがれて沖縄の男性と結婚したいという本土の女性(ヤマト嫁)が増えているといわれているが、彼女たちが沖縄での家庭生活に際し、その作られた沖縄イメージに合わせて求めているのが、沖縄の「伝統」としてのさまざまな家庭や地域の宗教行事(御願)の知識であり、若者向けの伝統行事の解説書がベストセラーになる背景には、こうした事態がさらに影響を与えているのではないか、というのが氏の見方である。また、自ら積極的に望んで沖縄で家庭生活を送りに来たわけでなくとも、たとえば本土出身で沖縄在住の転勤族の妻たちの中にも、グループをつくって沖縄文化を学ぼう

と活動している女性たちもいる。彼女たちの場合は夫の転勤による新しい生活のフラストレーション、ストレスを解消する手段としての色合いが濃いが、ちなみにこうした傾向については、戦前から沖縄に嫁いだ本土の女性についても、沖縄の女性自身より沖縄文化に詳しかったといったことなども従来からよく言われていることである。とくに上記のような最近の女性たちのニーズも近年のメディアの動きに影響を与えている可能性もある。県外からの来住者がかえって県内の住民に沖縄文化を伝えるといった現象が一層見られるようにもなってきていることになると氏は見ている。

このようにしてみてくると、氏の総括的な見解としては、近年の沖縄は明らかに戦前から復帰まで続いていた近代化、本土化の流れとは逆に、とりわけ社会や文化のメンタルな方向としては内向きの流れとして伝統的な宗教世界、精神世界への回帰が強くなってきているように思われるということである。90年代以降本土でもブームとなっている沖縄から発信される若者の音楽文化の独自性にしても、それが発表される場はヤマトであり、さらにはグローバルな場でさえあったりするが、メンタルな動きとしてはあくまで内に向っていると氏は捉えている。政治的にはそれは2006年の県知事選挙で琉球独立を唱える候補者へある程度の支持が集まる現象にも通じているとも見られる。また沖縄域内の動きとしては、都市部よりも地方に行くほど作られた伝統の導入に熱心な側面も見出せたりする。これらを概観して言えば、氏としては、本土への同化でなければ一方的な「伝統の創造」へ向うというこの双方のベクトルの動きをともに批判的に見ざるをえないというのが結論のようである。

3．まとめにかえて

以上今回の調査で生活史調査のインフォーマントをお願いした宮城晴美氏の聴き取り調査結果の概要を提示した。結論としては、さまざまな制約の中で今回取り上げられたのは1件の事例に過ぎなかったけれども、歴史の専門家としての見解も含めて、戦後から現代にかけて激動期の沖縄社会を生きてこられた1人の女性の生活史を通して、エスニック・アイデンティティのあり方の多様な変容とその可能性を展望するひとつの契機をこのインタヴューの中に見出すことは可能であると思われる。その際には、とくにこの調査が意識的に問題の根底にすえてきたように、日本というマルチ・エスニックな社会が沖縄にとっては常に「本土」という政治的経済的文化的中枢の支配システムとして対峙的に立ち現れてきたことが改めて浮き彫りになってきたことが、筆者としては非常に印象的であった。言い換えれば日本おける沖縄の社会と社会意識

とは、その本土との関係において限りなくそうした支配システムに同化していく方向の中で存在すること(ここでは仮にそうした方向を本土化と読んでおく)と、逆にその支配システムから限りなく異化を図り、それとは異質であるがゆえに自らの伝統の中により深く沈潜していく方向の中で存在すること(同じくここでは沖縄化ないし沖縄ナショナリズムと呼んでおく)の２つのベクトルの葛藤の中に自らを位置づけてきたことが改めて確認できたといえよう。

以下まとめに代えて、1.で筆者が提起した日本におけるエスニック・マイノリティの生活の場としての沖縄が抱える代表的な現代的諸課題を振り返りながら、この調査結果の内容をそれらに関わらせつつ、上記の論点を確認しておこう。

たとえば宮台のいう「本土の犠牲問題」は、宮城氏にとって、そして恐らく現代も直接間接の戦争経験をひきずりつつ生きる沖縄のある世代以上の人々にとって、依然として圧倒的に大きく重要な、本土との関係の中核に位置する問題であろう。本報告では直接のインフォーマントではなかったが氏の母堂の残された手記と、それをまとめた氏の著作も含め、氏のこの問題に関する語りの全体が、とくに集団自決というこの上なく重い戦争体験の上に戦後の人生の歩みが積み重なっていくことの生々しい現実感をともなって聴き手としての筆者には認識された。ここには、現代の沖縄において紛れもなく本土化を厳しく拒否していく意識と社会のあり方が明確に存在しつづけていることがはっきり確認されたといってよい。

その意味でそれは、いわば反本土化というエネルギーとして結晶化していく契機を潜在的にはらみつづけている意識と位置づけてもよいかもしれない。

しかし一方で、得られた情報の限りでは、その反本土化のエネルギーは現在の沖縄で、たとえばグローバル化を逆に利用して本土を飛び越え沖縄がアジアを初め世界の諸地域と直接政治、経済、文化の諸方面でハイブリッドな関係の可能性を提起し、そこに沖縄の新しいアイデンティティの基盤を見出す、といった積極的で開放的な展開を示すまでにはまだ必ずしも至っていない。むしろ近年の動向は、氏が繰り返し指摘しているように、逆に内に向って閉じる形で、沖縄化ないし沖縄ナショナリズム形成と方向へ向いつつある特徴を示してきているのかもしれない。聴き取り内容からもうかがわれるように、宮城氏が戦後から現代にかけての沖縄社会を生き抜きながら、沖縄の文化と伝統にこだわりつつもそのナショナリスティックな発現には常に警戒心を緩めなかったのも、それがせっかくの本土文化の相対化といった本来沖縄にとって望ましいエスニック・アイデンティティの方向から逸脱したものになっていくことを危惧してのことであったと筆者は理解している。

そうした観点からすると「域内対立問題」は、社会意識のレヴェルにおいては、かつて王府の時代には王府によって「創造された」沖縄の「伝統」の普及・拡大のベクトルとそれに対立する地方・離島の伝統的価値のベクトルとの対比図式として表出していたが、今や都市部や若い世代(そこにはメディアの影響力と県外からのニューカマーの役割という複雑な要素も含む！)が積極的に沖縄ナショナリズムという新しく「創造された」伝統への志向を強める中で、農村部や離島は「本土化」と「沖縄化」の双方が同時に進行して混沌とした状況の中に置かれているといった図式も想定されうると思われる。そして本土に対する沖縄と同時に、沖縄域内の都市部といった中枢部に対する農村部、離島といった域内の周縁部にそうした矛盾が集約的に現出する状況は、まさに今日「構造的貧困問題」としてますます深刻化しつつあることはいうまでもない。そこには、政治、経済、そしてメディアの各方面におよぶ本土の支配システムが、グローバル化と市場化の流れに即して、反本土化のエネルギーさえ吸収して一層強固なものになっていくプロセスまでもが絡み付いていることも忘れてはならないであろう。

上述したとおり、現在の沖縄の社会と意識が、本土化に厳しく対峙する反本土化のエネルギーを維持しつつ、そのエネルギーを内向きの沖縄化ではなく、本土=日本社会を相対化して地球社会に開かれた展望を持つためには今何が必要なのか。筆者のこの限られた今回調査結果では得られなかった可能性が、必ず沖縄社会のどこかに胚胎されていることを期待しつつ、この報告をひとまず終わることとしたい。

なお本稿では直接触れられなかったが、今回の調査においては、宮城氏のほかに有識者調査のインフォーマントとして、とくに沖縄大学人文学部教授金城一雄氏(社会学)には、本調査の問題意識を十分に理解し、沖縄の社会と文化の現状全般について、グローバル化の流れの中で本土化と沖縄化のそれぞれのベクトルの今日的あり方を中心に、具体的事例を挙げながら筆者に対して多くの予備知識をご教示いただいた。記して深く謝意を表する次第である。

〈注〉

(1) この資料として、宮城晴美,2000,『母の遺したもの―沖縄・座間味島「集団自決」の新しい証言』高文研,を参照のこと。なお、本年になってこの座間味島の集団自決をめぐる問題を中心にして、沖縄戦における民間人の「集団自決」に関する記述が、文部科学省の教科書の検定により高等学校の日本史教科書において大きく内容が変更され、日本軍の命令による強制があったとする従来の記述についての修正が行なわれるという事態が起こり、マス・メディアでも大きく取り上げられた。本稿の直接的テーマから離れるためここではこの問題に関する筆者個人の論評は割愛する。ただこうした動きの背景に関して、「集団自決」が軍の命令ではなかったことの根拠として一部の当時の関係者の発言等の中にしばしばこの資料が言及されていることについては、今回の調査の中でインフォーマントとの対話によって、この資料のそうした引用・利用のされ方に対してインフォーマント自身がはっきり不本意であると認識していることがあらためて確認されたことだけは触れておきたい。インフォーマントがその母の長年にわたる心の重荷となっていた集団自決についての「真実」を、この著作を通して誠実に明らかにした趣旨は、決して事実としての集団自決の発生とそこへの軍の関与を完全に否定することにあったのではなく、むしろ紛れもなく本土の犠牲となり、戦後も当事者としての住民相互の間に深い傷痕を残し続けている沖縄戦の実相を正確に伝えたいというインフォーマント自身の誠意がその根底にはあったことを筆者はこのインタヴューを通して実感している。近年の特定の方向へのイデオロギー的傾斜を帯びた一連の政治的な言説が、こうしたインフォーマントの思いとはむしろ逆の方向にその著作を利用しようとしている流れへのインフォーマントの憤りの大きさを筆者は痛感したこともここでは告白したい。なお、この点に関するこの注の言及はインフォーマントの発言内容をもとに、あくまでもすべて本稿の筆者の責任においてここに記述していることを付記しておく。

(2) インフォーマントの個人名については、とくにご本人から研究報告の公表の際には開示することを了解していただいているので、ここでは以下すべてそのように表記する。

(3) 既述のように、純然たるインフォーマント個人の「ライフ・ヒストリー」調査としての側面と、マルチ・エスニック社会としての日本における沖縄の現状とその社会・文化的特質についてのインフォーマントの見解を明らかにする「有識者」調査としての側面を併せ持つ本調査の結果に基づく本稿の記述としては、これ以降の部分については、後者の有識者調査としての側面が中心となることを念のため注記しておきたい。

〈参考文献〉

安仁屋政昭,1997,『沖縄戦のはなし』沖縄文化社

青木誠,2000,『沖縄うたの旅』ボーダーインク

稲垣忠,2005,『「沖縄のこころ」への旅』高文研

犬塚協太,2006,「沖縄の家族規範における「伝統の創造」の諸相―宮古島調査と韓国・済州島調査結果をふまえて―」,橋本（関）泰子編著『アジア家族の変容と「伝統の創造」に関す

る比較研究―日本・韓国・中国・タイ―』(平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書),127-148
勝方=稲福恵子,2006,『おきなわ女性学事始』新宿書房
金城重明,1995,『「集団自決」を心に刻んで』高文研
高文研編,2005,『沖縄は基地を拒絶する』高文研
松井克明編,2004,『嘉納昌吉と、沖縄と日本』現代人分社
松島泰勝,2006,『琉球の「自治」』藤原書店
森木亮太,2002,『青い空とアダン』ゆい出版
宮台真司,2005,「沖縄を知ることは自分たちのパトリを知ること」,森口豁『だれも沖縄を知らない』筑摩書房,320-334
宮城晴美,2000,『母の遺したもの』高文研
西成彦・原毅彦編,2003,『複数の沖縄』人文書院
琉球自治州の会,2005,『琉球自治州の構想』琉球自治州の会
新城和博,2006,『うっちん党宣言』ボーダーインク
よくわかる御願ハンドブック編集部編,2006,『よくわかる御願ハンドブック』ボーダーインク